

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

2011年10月23日

小立廉 現代文芸論専修課程 個人派遣

研究課題名

ミュンヘン——都市における幻想の一形態

派遣先での活動

**(1) 派遣先の基本情報**

ドイツ、ミュンヘン、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ミュンヘン大学）

**(2) 派遣期間**

2011年7月31日～2011年9月7日（39日間）

研究成果

(1) 当初の概要

たとえ一つの国の一人の作家を対象に研究するにしろ、対象となる作家の母語のみに通じているのでは、今日的な視点に立って研究を進めるうえで、必ず困難に直面するだろう。それは、外国の研究文献を読めない、他国の研究者とのコミュニケーションがとれない、といった実際的な問題だけに限定されない。私の現在の研究対象はロシアだが、ロシアの作家たちは、ソ連時代の亡命作家に限らず、はるか昔からモスクワやペテルブルクを離れ、西欧あるいはカフカスへと向かっていた、というのは単なる文学史的事実であるとも言えよう。重要なのは、そうした作家たちが、さまざまな言語が存在する世界をどう生きたか、また、かれらにとって異文化と接触するとはどのようなことだったか、自分のこととして経験し、捉えなおすことである。一カ国、一言語に絞っていたのでは、このような超地域的な視点からの研究は不可能である。つまり、多様な言語、文化を捉えることで、一国の言語、文化の相対化もはじめて可能となる。これはその国に固有な伝統、文化を無効にするのではなく、相対化の中で自明視されていたものを鍛え直し、あるいは新たな価値を発見し、有効にすることも意味する。研究対象を一カ国に限定するにせよ、越境的な研究をするにせよ、言語、文化の多様性は無視できない。私の研究対象であるゴーゴリは、ドイツ文学に大きく影響を受けている。そこで今回のプログラムではドイツを派遣先として希望し、当地で開催されるサマースクールでのドイツ語の研鑽を目的とする。

(2) 実際に達成された成果

受入先のミュンヘン大学が開講するサマーコースに参加し、1日3時間半程度、ドイツ語の授業を受けた。授業内容は、文法の確認に始まり、読み・書き・聞き取り・会話の四技能がバランスよく組み込まれていたように思う。日々の課題の量はあまり多くなかったが、最終週には簡単なプレゼンテーションやある程度まとまった文章を載せる冊子作りが課され、ややハードだった。また、週末や平日の放課後にはレクリエーションプログラムが組まれ、他の参加者との交流を深めた。このような短期間で、もとより語学力の劇的向上は期待していなかったが、一か月間現地で生活を送る中で、(俗流比較文化論的な捉え方は避けたいが)ドイツ人のドイツ語による思考のしかたについて自分なりの理解を得られたのではないかと思う。私は手続き上のミスで大学の用意した寮に入れなかったのだが、これがかえって良い結果をもたらした。学生寮の住人はほぼサマーコース参加者で占められており(コースの参加者は200人以上!うち日本人は10人弱か。ロシア、スペイン、中国からの参加が多かった)、ドイツ語が達者でない者同士は共通言語として英語を使わざるを得ないから、完全にドイツ語漬けになるとは言い難い。結局、自分で住居を確保しなければならず、落ち着いたのが一般家庭の一室だったのだが、この家主が英語をあまり解さなかったので、自然ドイツ語を使う機会が増えた。一般家庭とはいえいわゆるホームステイではなく、三階建ての最上階がWG(Wohngemeinschaft:住居共同体の略で、寝室は個室を与えられるが、台所、トイレ、風呂などを共有する居住形態。シェアハウス。学生寮や集合住宅では一般的。この家では家主は一、二階に住んでいた)になっていて、そこでミュンヘン大学のドイツ人学生と家主の息子の三人で暮らした。ドイツ語の不得手な私に気を使ってくれたのか、彼らのドイツ語は非常に聞き取りやすかった。私が住んでいた家は大学から電車とバスを40分乗り継いだところにある閑静な住宅街で、近所に商店も遊び場もなく、あるのは広大な墓地と墓石屋、花屋だけだった。したがって大都市にありがちな夜遊びの誘惑とは無縁で、勉強するには良い環境に恵まれた。ルームメイトのミュンヘン大生も、夏休みだというのにどこへも行かず、研究室のパートナーとずっと勉強していたのだが、そのパートナーはドイツ育ちの日本人だった。日本人を見かけるのも珍しくない大都市とはいえ、意外な場所で出会うなあと思ったものだ。

研究面では、私の卒業論文のテーマはゲーゴリの「肖像画」という中編なのだが、これは直接ミュンヘンに関係しない。しかし、「肖像画」に限らず、ゲーゴリの後期の小説には都市における幻想を扱った作品が多い。これを西欧の幻想小説、ゴシック小説のフォロワーにしてロシア・リアリズム文学の祖というゲーゴリの二重性として捉え、広くヨーロッパの文脈に置き直してみたとき、避けて通れないのがドイツ文学との関係である。19世紀に多くみられた都市幻想文学の延長線上に世紀転換期のミュンヘンを見据え研究することは、卒論のテーマに関連するのはもちろんだが、卒論に収まらない部分がそれ以上にあるだろう。こうした時間、空間を越えた研究は、大学院進学以降の研究にも十分な材料を提供するものと期待できる。また、西欧の言語を一つでも習得しておくことは、今後の研究の幅を広げるにあたって助けになるだろうから、その意味での収穫も大きかった。

また、今回は市内の美術館、(古)書店、図書館などでの資料博搜の時間が十分に得られた。これらはとくに、世紀転換期のミュンヘンの文化的中心地であったシュヴァービング地区に集中している。ミュンヘンは第二次大戦時の空襲で大きな被害を受け、昔日の面影を残している場所は限られていたものの、この地区には今なお大学、図書館、古書店などが集中していて、文化的地層の断絶は感じられなかった。古書店にはレプリカであろう”Simplicissimus”(ミュンヘン在住の作家が多く参加した、リベラルな気風の諷刺雑誌)のポスターが飾ってあり、調度は古びて洒落た味を出していたのだが、だからと言って懐古趣味に浸ることもなく、店には教科書や学術書を求める学生の姿も見えた。学生街の古書店らしい光景である。

### (3) 今後の展望

今派遣の成果が卒業論文に反映されるのは間接的な意味においてだが、今回あえてロシア以外の国に行ったことは有意義であった。大学院進学以降、現在よりさらに広い視点でロシア文学の有様を捉える必要に迫られたとき、あるいは研究の方向転換を試みるときに、このドイツ体験が導きの糸あるいは俯瞰の足場となるだろう。語学力に向上の兆しが見えたので、帰国後もたゆまず研鑽に努めたい。また、海外で学生生活を送るということに具体的イメージを持てたことが、今後留学する際に役立つことだろう。最後に、今後の応募者に向けて言いたいのだが、研究対象の国以外にも積極的に留学することを勧めたい。本プログラムは他の海外派遣プログラムに比べ、個人の裁量に任せられる部分が大きいように感じる。これを利用しない手はないのだから、情熱と少しの知性をもって飛び出していくべきだと思う。直接自分の研究に結びつかないかもしれないが、意外なところに突破口があるかもしれない。